ものならんか、或は尚廣き意味に於て只室韋と稱したるものとするも、其の中には又黑車子室韋も數へられたるものなるべし、かくて回鶻は黑車子の支持を失ひ、此の後は僅に糧を奚に仰ぎて、其の命脈を保ちたりしに、此の唯一の依據たりし奚も、前記の如く、大中元年に至りて張仲武の討つ所となり、遂に回鶻は寄托する所無く、其の衆日に耗散し、舊唐書廻紇傳に據れば、大中二年春に至りては「唯名王貴臣五百人已下依室韋」とし、新唐書同傳も亦之に從へり、されば一旦室韋との關係の絶えたりと思はるゝ回鶻は、茲に至りて再び其の保護の下に入りたるものにして、遂に全く窮逼の情態に陷りたるものなりとす、然るに舊唐書廻紇傳には、更に其の後の有樣を記して

張仲武因賀正室韋經過幽州、却令還蕃、遣送遏捻等、來向幽州、遏捻等懼、是夜與妻葛祿子特勒毒斯等九騎西走、餘衆奔之不及、廻鶻諸相達官老幼大哭、室韋分廻鶻餘衆、爲七分、七姓室韋各占一分、經三宿、黠戛斯相阿播、領諸蕃兵稱七萬、從西南天德北界來、取遏捻及諸廻鶻、大敗室韋、廻鶻在室韋者、阿播皆收歸磧北、在外猶數帳、散藏諸山深林、盜劫諸蕃、皆向西頎心、望安西龐勒之到

と記せり、此の記事は前記「至大中二年春、唯名王貴臣五百人已下依室韋」に續きて記さるゝ所にして、其の賀正使の幽州を過ぎたるは、同年の事なるが如く、通鑑も亦之を大中二年正月の條に繫けたり、されば遏捻可汗の捕へられ、室韋七姓の分取したる回鶻の、更に黠戛斯に捕へらるゝに至りしも、此の時正月を距ること遠からざる時なりしなるべし、余輩は茲に烏介可汗の下に屬したる回鶻の一支に關する論證を終り、轉じて西方に據るに至りしものに就きて簡單なる論述を試み、以て此の篇を終らんとす。